

郷土文化財紹介

石造物シリーズ

＜原市右衛門建立の石碑＞

原市右衛門の記録は、「木曾考」の中に見ることができる。木曾考は、江戸期木曾の代官山村良景が編纂したものであるが、その中で義昌従士名の一覧に名があり「原市右衛門 妻籠城にこもる」と記されている。他に坂下に関わりのある従士として、原平左衛門の名が見られ、おなじく「妻籠城に籠もる」とある。原平左衛門の記録は、さらに木曾考の中で木曾義昌朱印書札の写しとして「今度河折(川上)籠屋(牢屋)之調略神妙候爲加恩於坂本(坂下)五貫地出置候、苗木成就之上場所聞届可申付者也、仍如件。元龜四年(1573年)癸酉八月廿四日原平左衛門殿」と記録される。

「妻籠城に籠もる」とは、天正12年(1584年)頃の「妻籠城の戦い」と考えられる。徳川家康から離れ豊臣秀吉方に組みした義昌は、家康方に攻められる。義昌家臣団は妻籠城に籠もり抵抗、家康方は妻籠城を攻めきれず兵を引いてしまいました。その後、秀吉は義昌を関東に移封し木曾支配を行う。義昌家臣団は、義昌に順うもの、木曾を離れるもの、木曾に残り時機到来を待つものなどに別れてしまいます。

この様に戦国時代の終わり頃、市右衛門と平左衛門は、木曾の武将として坂下に非常に近いところで活躍していたが、義昌の関東移封を境に市右衛門ら数名が坂下の地に移り帰農したものと考えられます。「市右衛門」名は6代に亘り引き継がれるようですが、正徳5年(1715年)坂下の町組庄屋に原市右衛門の名が見られます。

この原市右衛門名の刻まれた石塔が木曾川縁に4基ほど建てられています。船渡から木曾川上流へ向かって護岸堤防上を百数十メートル程進むと民家のすぐ下で堤防下の田んぼの端に平地が整備されていて、ど

なたかにより草刈りもなされ、そこに幾つかの石塔と共に肅然と並び対岸を見つめています。対岸は通称山口山ですが、木曾川に沿い山肌に直線を刻む国道19号の騒音すらも和らげ、木曾川縁から上方へ四季折々に風情を変え目を楽しませてくれます。



↑木曾川と対岸を見つめる原市右衛門建立碑



「延宝四(一六七六)丙辰七月廿二日 延宝五丁巳九月十四日 原市右衛門造焉と刻まれている。←

これらの石塔群は、あちこちに分散していたものを現在の場所に移動したと聞いています。いずれにせよ坂下村を形づくってきた人々の一族として語り継いで行きたい。